父への想い

横須賀市支部　青木　康浩（子）
戦没者　青木　市郎
戦没地　旧満州

私の父は昭和十六年七月に旧満州牡丹江（現中国東北地方）に出征、昭和二十年八月十日現地にて戦死となっています。父が亡くなり六十五年の歳月が経ちましたが父への想いは正直あまりありません。

父が出征して五ヵ月後に五人兄弟の末っ子として私が誕生し、父に抱かれることも無く子供の頃は父というものをよく分かりませんでした。

私の家は青果商で主に軍に納めていたそうで母は私が生まれる寸前まで家の仕事をしていたそうです。終戦に近い頃には使用人も殆んど戦地に出征して大変だった様です。

子供の頃はどうして自分には父親がいないのだろうと思いましたが、叔父や叔母たちがなぜか私を可愛がってくれたことが後になり分かりました。

父が昭和二十年の戦死でも十年後の昭和三十年五月一日付けで県知事より死亡告知書を母は受け取り、それまでは留守家族として父は生きていたからです。そして、葬儀は同年五月二十七

©2011_財団法人神奈川県遺族会

日に行われ私は当時中学二年の時で初めて父が亡くなったのかと思いました。それまでは父は生きているものと母も兄弟も親戚も皆同じ思いでいたのでしょう。

私が大人になり家庭を持ち、子供をもったとき父親は生きていたら子供たちにどう接していたか正直分かりません。それから父のことを想うことがたまにありましたがその後、母が父の五十回忌までは元気で生きていなければといつも云っておりました。法事の時に父はどんな人であったのか子供や兄弟に知ってもらおうと冊子にして残したい気持ちで母に聞いたりしました。父は筆まめで戦地から激戦になるまではよく便りをくれていました。ハガキには、いつもお店のこと家族のことを心配しながら自分は元気でいるので心配はいらないと書いてありました。私の大きくなることも写真でしか見ることができなかったことを無念に思ったことでしょう。沢山の便りの中にたった一通、三つ折りの封書がありました、封書の中には山並みの絵が印刷してあり、其の下に日曜日に父が東寧という所へ外出した時の様子が詳しく書かれていました。満州は其の時は正月だそうで戦時中とはいえとても穏やかな楽しいひと時の便りで、最後にいつもの「元気でいるから安心してくれ」と日付は二月十五日と記載されていました。

私が子供のときに、住まいが類焼に会い父を知るものは殆んど無く母が大切に持ち続けてきた写真や数々の手紙を初めてみた時、心に描いた父への想いと今大事にしています。

母も父の五十回忌の二年後に亡くなり十四年が経ちますが、母が元気なうちに父親を知る色々な機会があったことを幸せに思い、日々の生活に感謝しながら、平和のありがたさを実感しているところです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会